

# kumamoto 32 artpolis

- \*くまもとアートポリス建築塾
- \*市民大学
- \*アートポリス推進賞とシンポジウム
- \*わたしとアートポリス
- \*アートポリス建築ガイド
- \*県政ふれあい教室
- \*国際交流基金 海外巡回展

 くまもとアートポリス  
kumamoto artpolis **32**

●発行/くまもとアートポリス事務局（熊本県土木部建築課内）  
〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1  
TEL 096-333-2537 FAX 096-384-9820  
<http://www.pref.kumamoto.jp/traffic/artpolis/index.html>



18 土 建  
③ 002



くまもとアートポリスニュース第32号  
2007年3月発行



この印刷物は環境に配慮して、再生紙100%と大豆インキを使用しています。

*kumamoto artpolis*

くまもとアートポリス2006

～「次世代モクバン」を語る～

くまもとアートポリスの設計競技

「次世代モクバン(新鮮な空間とフォルムをもつ木造バンガロー)」で最優秀賞を獲得した藤本壮介さんの実施設計が完成した。

平成18年12月16日(土)に熊本市の肥後銀行水道町支店4階ホールで開催された建築塾では、コンペ案から実施設計までの流れを追いながら、藤本さん、アートポリスコミッショナーの伊東豊雄さん、アドバイザー、そして学生など一般の参加者も一緒に今回のモクバン・プロジェクトについて語り合った。



師走の午後、熊本市水道町のビルの一室には建築を学ぶ学生や専門家、一般の人たちも含めは150人近い人たちが集まった。

「熊本から新たな木造文化の発信を」をテーマに、平成17年に行われた球磨村森林組合球泉洞休暇村バン

公開審査の結果選ばれた藤本壮介さんのプランは、35センチの角材を多用するダイナミックなもので、まさに「究極の木造建築」。最終審査の段階では審査委員からは斬新な空間表現への期待や、一方でコスト面やメンテナンスなど管理、安全性の問題などが指摘された。そうした



▲3人のアドバイザー(左より 桂さん、末廣さん、曾我部さん)

▲質問者の方々

ガローのコンペティションには、海外からの参加も含め、259点の作品が寄せられた。今回のコンペは「学びつつ創る、創りつつ育む」という第三期アートポリスのメッセージをよく表すもので、熊本を若い建築家が巣立つ場にしたという伊東豊雄・新コミッショナーの願いが込められている。35歳以下の建築家を対象にした木造のバンガローの設計・施工という小ぶりのプロジェクトながら全国的な注目を集め、多くの意欲作が集まった。

課題を抱えて一年間実施設計に取り組んだ藤本さん。今回の建築塾では藤本さんを囲んで、「モクバン」をテーマに討論会が進められた。

まず、施主である球磨村森林組合の犬童義一組合長が「林業は百年単位の仕事。森林を守り、次世代に引き継いでいくためにも国産の木材を積極的に使う建築をすすめてほしい」と挨拶。数々の課題をクリアしながら設計を完成させた藤本さんの労をねぎらった。続いて設計者

小さいプロジェクトだからこそより先鋭的に

猛烈にたくさんさんの模型が並んでいますねえ(笑)。この模型を見ていると、藤本さんを選んで本当によかったなあ実感します。ここ数年で若手を代表する建築家に藤本さんが育ってくれたことは彼を選んだほぐちちとしてもとてもうれしいことです。「モクバン」は小さなプロジェクトですが、建築の在り方を先鋭的な問いとして突きつけてきます。現在進行形のプロジェクトを巡ってみんなが自由に語り合う場が持てることは、新生アートポリスならではの楽しみです。建築を作るだけでなく、みんなで学び、考えるアートポリスにしたい。熊本はアツイですねえ〜!とってもらえる建築塾にしていきたいです。



くまもとアートポリス  
コミッショナー  
伊東豊雄さん

斬新な木造建築で森林の魅力をアピールして

いよいよ、「モクバン」が現実のものに近づいてきましたね。完成が楽しみです。このバンガローが森林観光事業に役立つものになることを願っています。現在の林業は8割が海外からの木材で占められています。国内の森林を守り、林業が生き残っていくため藤本さんのように新しい発想でユニークな木造建築を積極的に作っていただきたい。話題性のある個性的なバンガローが誕生することで、より多くの観光客が村を訪れてくれることを大いに期待しています。



球磨村森林組合組合長  
犬童義一さん

厳しい家庭教師にしごかれて、僕も大人になりました

太い角材をドカドカ積み上げていく今回のプランは、壁も床も一緒になってひとつの空間を構築していくイメージです。実際の木材を目の前にすると、その圧倒的な存在感に負けそうになりました。今まで考えてきたことがすべてゼロになり、建築が成立していくおもとのにまで立ち返っていくような貴重な体験をさせてもらいました。この一年間、4人のちょっとクワイ家庭教師がついて(笑)、キビシク仕込まれた感じです。アドバイザーの先生方には本当にお世話になりました。いよいよ春には着工です。実際に出来上がっていく中で、予想できない課題も生まれてくると思います。新たな発見を重ねながら、成長していきたいです。建築塾という場を与えられ、みなさんから直接意見や感想を聞かせてもらえることを大変うれしく思っています。



設計者  
藤本壮介さん

の藤本さんが「この1年で最初の案がどう変化していったか、みなさんに見てはしくて模型をいっぱい抱えて来ました」と、実際の模型を示しながら説明を加えた。「今回使う35センチ角の木材は人にたとえると80歳ぐらいだと聞き、えっとたじろぎました。そんな貴重なものを使うんだと、あらためて身が引き締まる思いです」。今回審査にあたったアドバイザーからは「予算面など問題が山積する中で、解決策をよく見つけ出したなと感心した」、「どんなに怒鳴られても、叱られても、藤本くんはいつもニコニコしていて、一体どんな人なんだろうと不思議だった(笑)」など、これまでの経緯や裏話なども披露され、会場は終始なごやかな雰囲気にも包まれた。

プロジェクトを通じて世代を超えた交流が生まれ、お互いの信頼関係ができ上がっていった。行政の担当者からは

「個性的なプランだけに安全面や耐震性、法規上の問題など心配な点もあったが、これをきっかけに法規の見方を考え直し、新しい取り組み方を探してみようと考えようになった」といった意見も聞かれ、アートポリスが施主、設計者、行政、地域へ与える影響の大きさを実感させた。

会場中央には大小の模型が並べられ、参加した人たちが興味深そうに見て回る姿が印象的だった。討論会終了後の意見交換会では、設計者の藤本さんに模型を見ながら話を聞いたり、アドバイザーの建築家を学生たちが取り囲んで話し込む光景も見られた。

「一流の建築家の先生たちが気さくに話しをしてくれて、ホント感激しました」と話す学生たち。「こういうチャンスがあれば後輩や友達にも声をかけて、またぜひ参加したいです」と、目を輝かせていた。





昨年11月、子供たちと一緒に  
空間づくりを楽しく体験しようという  
ワークショップが開催された。  
竹やい草など熊本ならではの素材を使って、  
オリジナルな空間を作ろうという  
ユニークな企画に熊本の親子がチャレンジした。

# 【市民大学】 アートポリス親子講座 「ゆめの家をつくろう」 親子で楽しい 「家づくり」に チャレンジ!



【市民大学】



みんなで記念撮影



<7班>南の島みたいに開放的だよ



<6班>和紙とい草のコントラストに  
こだわってみました



<5班>壁がカラフルでしょ



アートポリスという地域の  
資産を未来に引き継ぐために  
神奈川大学工学部建築学科教授  
くまもとアートポリスアドバイザー  
曾我部昌史さん

それぞれに個性ある作品が誕生し、感動しました。出来上がった作品を見ると、まったく異なる“ゆめの家”が並び、多様な価値観が表現された作品になっていました。

子供たちを対象としたことが、今回とても重要なことだと思います。子供たち自身が「こういう家に住みたい」という気持ちを表現し、子供たちの視点で家づくりに取り組んだことが画期的です。熊本県はアートポリスというプロジェクトを進めてきました。その結果、熊本は優れた建築作品の集約地という他に類のない地域になったのです。子供たちが日々暮らす生活の場にもアートポリスの作品があるかもしれない。そんな恵まれた環境に育った子供たちが建築についてどういう意識を持つのか、自分たちが住む場所についてどんな思いを抱いているのか、とても興味のあるところ。今回の講座だけで判断することはできませんが、自分たちが住む地域をおもしろくしたいという意識は強いと思います。子供たちや地域に暮らす人たちの間から、家づくりへの夢が自然とわきあがってくればいいなあと思います。

親子講座では参加者の方たちの自由な発想を大切にしたいと考えました。そのために事前にサポーターの大学生たちと入念な打ち合わせをして、どうすれば子供たちの思いをよりよく引き出しせるか、準備を重ねてきました。大学生のみなさんはよく頑張ってくれました。彼らにとっても収穫の多いイベントになったのではないのでしょうか。子供たちも10年後には地域を背負う世代となります。これからは学生や若い世代がアートポリスに参加し、まちと建築、市民と建築家をつなぐ役割を担ってくれることを大いに期待しています。

# 親子で作る ゆめの家!

「市民大学」は、専門家だけでなく一般の方たちにも建築や環境デザインへの関心を高めてもらおうと開催されるもので、アートポリスの輪を広げたいという願いが込められている。

平成18年11月26日に熊本市の熊本県立大学第一体育館で開かれたアートポリス親子講座は、「ゆめの家をつくろう」をテーマに熊本県内の親子14組が参加した。

集まったのは小学生22人と保護者15人。くまもとアートポリスのアドバイザー曾我部昌史さんが講師をつとめ、熊本県立大学、熊本大学、崇城大学の建築を専攻する学生たち26人がボランティアで参加した。

午前10時30分に始まった体験教室。7つの班に分かれ最初はとまどい気味だった参加者たちも、講師や学生たちのアドバイスを受けながらそれぞれの“家”づくりに没頭していった。

素材は竹、い草、和紙、段ボールで、その使い方は自由。子供たちは保護者や学生たちと一緒に、竹で骨組みを作ったり、和紙を貼ったり、い草で屋根を葺いたり、それぞれにアイデアを出し合って楽しそうに作り上げていった。平面図から空間へ立ち上げていくグループや、最初から空間を意識してピラミッド型やテント風、台形に積み上げていくグループなど、自由な発想で思い思いの“家”を完

成させていった。

昼食をはさんで3時間余り。それぞれのグループごとに工夫を凝らし、夢を盛り込んだ“世界にひとつだけ”の空間が誕生した。時間を忘れて、自分たちの家づくりに熱中した。参加した学生たちも大人も子供も、ものづくりの楽しさを実感できた一日だった。



<1班>い草の壁にこだわってみたよ



<2班>折り畳んで運べるんだ



<3班>色んなところに工夫してみた



<4班>間仕切りもあるよ



表彰式



熊本県知事  
潮谷 義子さん

くまもとアートポリス  
推進賞選考委員長  
村橋 久昭さん

レベルの高い作品が集まった推進賞

県内の質の高い優れた建造物に贈られる「アートポリス推進賞」。2006年度は50点の応募があり、全体に高いレベルにある作品が目立った。

応募作品は住宅15点、公園5点、事務所・店舗付共同住宅および病院・医院が各4点、中学校2点、アーケード、飲食店、美容室などその他が16点。その中から一次審査の書類選考で9作品に絞られ、二次審査の現地調査を経て推進賞5点が選ばれた。内訳は公園が1点、専用住宅2点、歯科医院2点で、中でも天草市の「西の久保公園」は自然と人の共生を考えさせる画期的な作品だった。

表彰式の冒頭で潮谷知事は、建築の専門家から学生まで多くの参加者が集まったことにふれ、「アートポリスの知名度が年々上がり、最近では県外や海外からの見学者が増えてきている。熊本の顔としての存在感は大きい」と述べ、「未来へ向けて長いスパンで建築文化の価値を

考えていくことが必要」と語った。また市町村合併が進む中で、「何を自分たちの地域の核として発展していくのかを考えた時、その鍵となるのがアートポリスとユニバーサルデザイン。両者一体となって推進していかなければいけない」と、県としてアートポリスに力を入れて取り組んでいくことを強調した。続いて、選考委員長を務める崇城大学教授・村橋久昭氏が、「今回優れた作品が多く集まり、選考委員たちの討議が長時間に及ぶこともあった」と述べ、受賞作品それぞれへの感想と評価点を紹介した。「総じて、豊かな地域づくりが見える作品がそろい、“土着の地域づくり”というこれからのアートポリスの方向性を示唆するものとなった」と総評を締めくくった。



## 第12回くまもとアートポリス 推進賞表彰式・シンポジウム

26 熊本テルサ 3階「たい樹」

建築文化の向上をめざして熊本県内につくられた優れた建造物を対象に選ばれる「くまもとアートポリス推進賞」の表彰式とシンポジウムが2月26日熊本テルサで開催され、専門家や学生、市民など200人余りが参加した。

コーディネーター



くまもとアートポリス  
アドバイザー  
桂 英昭さん

パネラー



くまもとアートポリス  
コミッショナー  
伊東 豊雄さん



天草市長  
安田 公寛さん



くまもとアートポリス  
推進賞選考委員  
轟 多朗さん

地域づくりの核としてのアートポリス

後半のシンポジウムでは「地域再編と新しい顔づくり」というテーマで、コーディネーターと3人のパネラーが意見を交わした。

コーディネーターを務めた熊本大学助教授の桂英昭氏が、「建築を媒体として新しい地域づくりをやっているというのがアートポリスの主旨。市町村合併の結果、かつての地域のシンボルが失われていった。新たな地域のシンボルが必要ではないか」と問いかけると、パネラーの天草市長・安田公寛氏が「天草市は“日本の宝島・天草の創造”を基本理念に、地域に埋もれている宝(資源)を見つけ出し、見直し、磨き上げ、地域の人たちが心豊かに暮らせる宝の島をめざしている」と地域づくりへの思いを語った。今回、推進賞に選ばれた天草市本渡町の「西の久保公園」について、「もともとあった地形にほとんど手を加えず、人と自然が豊かに触れ合える場所づくりを考えたこと。全部を一度に作り上げてしまうのではなく、核になる部分だけを行政が作り、あとは地元の人たちとの共同作業で肉付けしていく“ヒューマンレイション”人と人とのつながりを大切にしたい施設である」との特徴を述べた。

アートポリス・コミッショナーの伊東豊雄氏は、地域との関わりというテーマで自作から2つの事例を映像を使って

紹介し、岐阜県の葬儀場では里山に囲まれた立地を生かしてコンクリートの屋根を波打つ形状にし、水辺の雰囲気を取り込んだこと。また地域住民との関わりでは、「オープニングに800人の住民が集まり、私が屋根に上ると眺めが良いですよと言うと、みんなが一斉に屋根の上のぼって壮観だった。コンサートなどにも使いたいという要望が出て、葬儀がない日には演奏会にも使っている」とエピソードを披露し、「地域の中で建築が生きていくということは何かを考えさせられた。本当に機能なんてどうでもよくって、優れた建築は何にだって使えるし、用途を超える力を持っているのではないかと語った。

選考委員でデザイナーの轟多朗氏は選考のプロセスなど裏話を披露し、「地域づくりのための新しい顔としてのデザインに求められるのは、意外にシンプルなイメージ。あそこに行ってみたいという行動につながるような魅力的な一枚の写真で地域は考え、情報発信していく必要があるのではないかとデザイナーの立場から示唆した。

伊東氏は「かつて日本の都市はどきよりも自然とよく調和し、共存していた。そうした過去の記憶を忍ばせ、自然環境を意識させるような現代建築が今、求められている」と、重層的な視点を含んだ新しい建築こそが地域の核に

なると語った。最後に会場からの質問に答えて安田市長が、行政の役割について「行政は地域づくりにおいてハーフメイトをめざすべきではないかと思う。すべてを行政が担うのではなく、住民がそれぞれの意見を出し合い、参加してもらいながら作り上げていくまちづくりこそがこれからのあり方ではないだろうか。行政は良きコーディネーターをめざしたい」と地域づくりの将来像を語った。



# わたしとアートポリス



## 韓国では熊本の アートポリスがお手本です

〔韓国観光公社〕 福岡支社長 **李 鐘薫さん**

韓国では建築の専門家や行政関係者の間でアートポリスが注目されています。熊本のアートポリスを知らない人はいないと思います。試しにインターネットで「アートポリス」を検索するとたくさんのサイトが出てきます。韓国での知名度、関心の高さを表しています。

私も昨年12月、熊本を訪れてアートポリスの建物を見学して回りました。熊本城と一体感のある県立美術館分館や、ガラス張りの熊本北警察署など、とても印象的でした。熊本のアートポリスは400年の歴史を持っているなあと感じました。熊本城という貴重な歴史的遺産こそがアートポリスの先駆です。長い歴史の積み重ねが現代の熊本のアートポリスにつながっていることを強く感じました。伝統と近代がうまく調和のとれた非常に優れたプロジェクトだと感動しました。韓国でも建築をまちづくりの視点からとらえ、アートとして建築文化を考えようという動きが最近生まれてきています。熊本のアートポリスは私たちにとってとてもよいお手本なのです。近い将来、韓国で第二、第三のアートポリスが誕生する可能性は大きいと思います。そうなったら、熊本と手を結んでアートポリス交流を進めていければ素晴らしいことです。

これからは専門家や行政関係者だけでなく、アートポリス見学を目的に熊本を訪れる観光客が今以上に増える

と思います。ハード面は十分に素晴らしい建築物がそろっているわけですから、今後はソフト面のさらなる充実を期待しています。たとえば、韓国から訪れる観光客にはそれぞれの建物の歴史的価値やデザインの特徴に加えて、それが朝鮮半島などどのような関わりがあるのかを知りたいのです。熊本城と韓国との歴史的関連性や、山鹿市の古墳館であれば古墳時代の日本と韓国との交流の歴史なども説明していただければ、もっと理解も関心も深まると思います。

韓国ではインターネットを利用する人がとても多いので、アートポリスのウェブサイトには建築の説明だけでなく、観光施設や温泉、美味しい店など周辺の観光情報なども掲載されているといいなと思います。そうなればもっと多くの人たちが熊本のアートポリスを見に訪れるでしょう。私も熊本の温泉の大ファンです。今回は熊本市を中心に見学しましたので、次は阿蘇や天草まで足を伸ばして、アートポリスをゆっくり見て回りたいと今から楽しみにしています。



〔県立あしきた青少年の家〕  
所長 **中島 隆二さん**

豊かな自然環境と  
建物の魅力を  
より多くの方に  
体感していただきたい



管理・研修棟



宿泊棟

撮影:宮井政次

この施設ができて9年になり、利用者は60万人を超えました。特に夏場はなかなか予約が取れない状況で、県内でも数少ないマリンスポーツが楽しめる施設として多くの方にご利用いただいています。一年に何回も足を運んでいただくリピーターのお客が増えているのもうれしいことです。

この施設の魅力は自然環境に恵まれた立地の良さでしょう。穏やかな八代海が目の前に広がり、天草の島々を望む風景はギリシャのエーゲ海を連想させます。波打つような宿泊棟の屋根のウエーブ、大きな船をイメージした食堂・浴室棟など建物全体が大海原をイメージしています。まさに海と一体化した建物といえます。施設の内部は近代的でとても快適な空間が広がっています。私は2年前に熊本市から赴任してきましたが、まず感動したのは施設のすばらしさです。トイレや浴室、食堂などこも清潔感にあふれ、明るい雰囲気です。快適で親しみやすい空間が「また利用したい」という気持ちにさせるのだと思います。外光がふりそそぎ、明るく、開放的な雰囲気です。ここにくるとほっとする、リラックスできると言っていただけるのがうれしいです。高齢者や障害のある方にもやさしい施設をめざしています。

海のイメージが強いせいか、ご利用が夏場に集中するのが課題です。今後は四季折々、オールシーズン楽しんでいただける生涯学習の場にしたいと思っています。遠方のお客さまだけでなく、地元のみなさんや幅広い年齢層の方々にも親んでいただけるような施設にしようとスタッフ一同頑張っています。



## 一般の人にもっと知ってもらいたい

私は大分県出身で、熊本大学で建築を勉強しています。県外の人たちからは「熊本大学だったらアートポリスでしょう」とよく言われます。それだけ建築の専門家や学生の間では有名で、十分に知られているアートポリスですが、一般の人たちにとっては専門的すぎて、敷居が高い感じだと思います。一般の人たちがもっと気軽に参加できるようなイベントが増えればいいなあと感じています。公共の事業なので、一般に広めていくことが必要だと思うし、アートポリス親子講座のような子供たちが参加できるような企画

〔熊本大学工学部建築学科〕  
3年 **増田 彩乃さん**



が増えていけば、もっと知られるようになるのではないのでしょうか。

建築を学ぶ学生にとって、身近にアートポリスという絶好の教材があるわけですから、熊本はとても恵まれた環境だと思います。これからは見るだけでなく、学生もどんどん参加できるようなプロジェクトがあればいいなあと感じています。設計から施工まで、学生たちの手で作り上げるような企画があれば、ぜひ参加したいです。

# アートポリス建築ガイドを知っていますか？

毎年多くの観光客や視察者がアートポリスの建物を見に訪れる。そうした見学者のために、アートポリスの施設を専門家の立場からわかりやすく解説してくれるのが「アートポリス建築ガイド」だ。2月9日(金)広島県尾道市から訪れた視察の方たちと同行し、建築ガイドを体験してみた。



【建築ガイド】

## 専門家がアートポリスをわかりやすく案内します

その日はあいにくの雨模様。暖冬とはいえ瀬戸内からの参加者には冷たい風が身にしみる一日だった。

アートポリス視察に訪れたのは広島経済同友会尾道支部の15人。県庁を出発し、午前中は県立美術館分館、熊本北警察署などを見学し、午後から熊本市営託麻団地、県営保田窪第一団地を回った。

最初に訪れた県立美術館分館ではスペインの建築家と共に設計にあたった熊本市の設計事務所代表・八木龍平さんがガイドを務めた。もともとは県立図書館だった建物の再生工事という特徴を、パネルや写真などの資料を使って説明した後、実際に内部の展示室などを案内して回った。外壁や床面に天草の石材を多用したことなど、現場を見ながら説明を加えていく。視察の人たちからは質問も出て、なごやかな雰囲気だ。次に訪れた熊本北警察署では、警察のイメージを一新する解放的で斬新なデザインにため息。内部の明るい空間にも驚きの声が上が

った。

視察団の代表、松下雅人さんは「心のこもった、わかりやすい説明でとてもよかった。建築の専門的なガイドは初めてだったが、とても有意義でした。アートポリスに携わる方たちの熱意を感じました」。また参加者の村上博志さんは「尾道でも昨年限景条例を作って景観に配慮したまちづくりに取り組み始めたところです。視察したアートポリスを尾道の新しいまちづくりに参考にしたいと思います」と話していた。

平成16年から始まった建築ガイドは、アートポリスを広く知ってもらうために建築の専門家がそれぞれの施設を現地で解説するというもの。視察や観光の団体などを対象に専門家がガイドをつとめる。

今後は一般の観光ボランティアの人たちとも連携をとり、アートポリスの普及に取り組んでいきたい。



【アートポリス建築ガイド】  
八木 龍平さん  
大和設計株式会社  
代表取締役

### 建築に興味を持ってもらえればうれしいです

熊本県立美術館分館の設計に携わったことがきっかけで、竣工当初からできるだけ時間を作ってガイドをするようにしています。この建物はリニューアルという特殊な条件もあって、参加者の皆さんからいろいろな質問が出ます。改築前後の写真なども準備して、できるだけ一般の方にはわかりやすいように、専門用語を使わずに説明できるよう心がけています。建築材に県産の木材や石などを使っていることや、段差の工夫、費用のことなど興味を持っていただけるような話題を考えて、ガイドするようにしています。

私たちはガイドをする立場ですが、依頼する方たちは「こういう便利なガイドがあることを今まで知らなかった」という方が結構多いようです。建築ガイドの存在を広く知ってもらうためにも、県外からの観光客が宿泊されるホテルや旅行案内所などにガイドの告知やPRをすればもっと利用者が増えるのではないかと思います。

## 県政ふれあい教室

熊本県の取り組みを一般の県民の方たちに広く知っていただくために開催している「県政ふれあい教室」。

平成18年11月29日には、「ユニバーサルデザインとアートポリス」というテーマで体験学習コースが実施され、41人の方たちが参加した。くまもとアートポリスのプロジェクトを見学し、アートポリスを身近に感じていただくと共に、建物に生かされたユニバーサルデザインの考え方を実際に体験してもらおうという試みだ。当日はアートポリス事業で建設された上益城郡山都町の「鮎の瀬大橋」と「清和文楽邑」を見学。清和文楽邑では郷土料理館で地元の手作りの郷土料理を味わい、文楽館の建物などを見て回りながら、アートポリスという現代建築のデザインの中に「すべての人にやさしく使いやすい」ユニバーサルデザインがどのように生かされ、取り入れられているのかを実際に建物の内部を見学しながら体験することができた。



●鮎の瀬大橋での説明風景



●清和文楽邑をまわりながら説明



●郷土料理館での説明状況

## 国際交流基金海外巡回展



▲モンゴルの首都・ウランバートル市の「サナバザル名称国立美術館」でのくまもとアートポリス建築写真展開会式(2006年10月)

●左からバトムフ・モンゴル教育・文化・科学省文化芸術局長、サラントヤール・ザナバザル名称国立美術館館長、市橋康吉駐モンゴル日本国特命全權大使

アートポリスは日本国内だけでなく、広く世界に向けても紹介されている。日本の文化交流の促進、日本と外国との相互理解のために設立された独立行政法人「国際交流基金」では、日本の文化を海外で紹介するためのさまざまな事業を行っている。こうした活動の一環として、日本の伝統文化や現代美術、デザインなど日本の文化を世界に伝える展覧会を開催している。くまもとアートポリスも、そうした現代の日本を代表する文化活動のひとつに選ばれ、平成15年から世界各地で巡回展が開催され、くまもとアートポリスの趣旨やそれぞれの施設などが詳しく紹介されている。平成18年はカナダ、マレーシア、モンゴル、ネパールなどを巡回、今年も引き続き、ベトナムなどアジア各地で巡回展が開催される予定だ。

くまもとアートポリスが文化交流事業として世界で紹介されることで、アートポリスの文化としての側面にもさらに注目が集まることが期待されている。